

令和 4 年 6 月 6 日現在

機関番号：34428

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00305

研究課題名(和文) 中世における神詠の形成と解釈についての研究

研究課題名(英文) A study on the evolution and interpretation about shin'ei (Japanese poems composed by deities)

研究代表者

橋本 正俊 (HASHIMOTO, MASATOSHI)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：30440655

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：中世の日本において、神詠が大量に出現し、さらに多様な解釈が展開した動向を明らかにした。特に、中世の和歌、学問、思想を考える上で重要と思われる神詠を収集し整理した。対象としたのは、中世に神詠として新たに作り出されたもの、従来知られた和歌の作者に神を当てたもの、古代の神詠に対して中世に新たな解釈を加えたもの、である。神詠と合わせて、神詠説話にも着目し、ある和歌がどのように神詠として形成され、解釈が加えられていったのか分析した。それらの成果をもとに、神詠の出現した背景とその展開の様相について明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、神詠に焦点を絞り、その動態を全体的に捉えたところにある。個々の神詠についてはこれまで研究はなされてきたが、部分的で一面的であったと言える。本研究では時代や信仰対象を超えて、神詠をテーマに設定することで、中世研究に新たな視点を提供することができた。また、細分化が進んでいる文学研究において、和歌文学、説話文学、宗教文学といった垣根を越えた研究ができたことにも意義がある。今後、本研究の成果が諸分野の研究に活かされることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：In medieval period of Japan, shin'ei (Japanese poems composed by deities) appeared in large numbers. This study investigated them and revealed developments of various interpretations of them. A special focus was upon shin'ei poems that are considered important for thinking about medieval Japanese poems, studies, and ideas. And this study focused not only on shin'ei poems, but also on the narratives behind the poems. This study analyzed the process by which a poem was formed as a shin'ei poem and by which interpretations were added to it. Based on those results, this study clarified the background of the appearance of shin'ei poems and the evolution of them.

研究分野：日本中世文学

キーワード：神詠 中世神話 山王権現 春日権現 天神信仰

1. 研究開始当初の背景

中世は、とりわけ宗教と文芸が深く融合した時代であったことはよく知られている。そのことは、例えば中世の勅撰和歌集には釈教歌、神祇歌の部立がもうけられ、またそれらが歌集の重きを占めるに至ったことから窺える。その神祇歌は大きく、人が神について詠む歌、また神に手向けの歌(奉納和歌、祭礼関係の和歌など)と、神が人に詠みかける歌(託宣の歌など)とに分けられる。後者を特に「神詠」と言う。

神詠についての研究としては、八雲神詠(『日本書紀』に見られるスサノオの神詠「八雲立つ」歌)をめぐって中世に展開した口決についての研究、あるいは天神御詠(北野天神が詠んだとされる歌。天神信仰の隆盛に伴い中世に多数出現した)についての研究、さらには謡曲にも影響を与えた中世の『古今和歌集』注釈についての研究など、特定の分野の研究が進んでいる他、個々の神詠については、特に説話文学研究から取り上げられることがあるものの、神詠という事象そのものを論じた研究はほとんどなされていないと言える。しかし、院政期以降、文芸書、宗教書などに多数の神詠が出現したことは注目されてよい。新たに神が和歌を詠むこともあれば、従来知られていた和歌が、実は神詠であったと解釈されることもある。神詠をめぐって様々な説が浮上し(ここでは神詠説と称することとする)時にはそれが説話化されていく(ここでは神詠説話と称することとする)。このように神詠が次々と出現し、その解釈が展開したことは、中世の文学史においても、また宗教史、思想史においても看過できない現象である。中世の和歌史、そして宗教史、思想史の研究が新たな局面を切り開いている今日、神詠の全体像を視野に入れた研究を進める必要がある。

2. 研究の目的

神詠は、古くは『古事記』『日本書紀』に引かれる、神々が詠んだ歌をその例としてあげることができるが、本研究で対象とするのは、中世に新たに出現した神詠と、それをめぐる解釈である。院政期以降、文芸書、宗教書などに多数の神詠が出現する。新たに神が和歌を詠むこともあれば、従来知られていた和歌が、実は神詠であったと解釈されることもある。さらに神詠に対して多様な解釈が加えられたりもする。

本研究では、特に院政期から鎌倉時代、さらには室町時代も視野に入れ、中世の神詠を調査、収集し、分類、整理する。そして、中世に神詠が大量に出現した背景と、その展開の様相を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 本研究の対象について具体的に示す。

まず、対象となる資料を大きく分けると、次のようになる。

- ・勅撰和歌集、私撰集などの和歌集
- ・和歌、特に『古今和歌集』の注釈書、秘伝書
- ・歌学書を中心とする学問書
- ・いわゆる説話集を中心とする文学作品
- ・仏教、神道関係の伝書

具体例を示すと、は『新古今和歌集』などの勅撰和歌集の神祇部に収められる歌群、は毘沙門堂本『古今和歌集注』に代表される、和歌作者に神名を当てようとする注釈書、は院政期以降の歌学書などで、特に『俊頼髓脳』に見られる神詠説は後代への影響からも注目される。は『今物語』のように、神詠説話を含む作品群、は山王神道であれば『山家要略記』のように多数の神詠説を含む伝書があげられる。

これらの資料から次のような神詠、及びそれをめぐる神詠説、神詠説話を抽出する。

- ア. 中世に新たに創出された神詠(古代の文献には確認されず、中世の文学、宗教資料などに始めて見出される神詠)及び神詠説、神詠説話
 - イ. 従来知られた和歌の作者に神を当てた神詠(『古今和歌集』所収の作者未詳の和歌で、中世に神詠とされたものなど)及び神詠説、神詠説話
 - ウ. 古代以来の神詠をめぐる解釈(記紀神話などに見られる神詠に対して、中世に展開した解釈)
- これらを総合的に調査し、分析することで、中世の神詠とそれをめぐる解釈を体系的に捉える。また抽出した神詠について、どのような資料のどのような文脈において神詠が引かれているのか、またその資料はどのように享受されているのかという点に留意しつつ、整理していく。

具体的な方法は次の通りである。

(2) 中世の神詠、そして神詠説、神詠説話を全体的に把握するために、(1) ア. 中世に新たに創出された神詠及び神詠説、神詠説話 イ. 従来の歌の作者に神を当てた神詠及び神詠説、神詠説話を対象として、神詠の一覧を作成する。基本的には、典拠、神名、和歌、そして神詠説または神詠説話の概要を一覧できるものとする。

(3) ア、イ、さらに ウ. 古代以来の神詠の解釈 を対象に、注目すべき事例を取り上げ、どのようにその和歌が神詠として形成され、解釈が展開していったのかを分析する。

(4) 上述(2)(3)を踏まえて、中世に神詠が大量に出現した背景と、その展開の様相を明らかにするべく、考察を進める。

4. 研究成果

(1) 対象となる資料の収集

公刊されている資料や公開されているデータベースを調査した他、国立国会図書館、国文学研究資料館、天理図書館などの諸機関に所蔵されている未公開の資料なども調査し、3(1)ア・イ・ウに該当する、神詠、神詠説、神詠説話を収集することができた。また、特に『古今和歌集』仮名序をめぐる神詠説を記載するものとして注目される、京都大学中院文庫蔵『古今序抄』と東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』序注を、対照させる形で翻刻紹介した。また、資料調査で得た成果を論文にまとめた。

(2) 神詠一覧の作成

(1)をもとに整理し、中世神詠の一覧を作成した。成果としてはまだまだ不十分なものであるが、(3)(4)の成果に繋げることができた。一覧については、今後も継続して充実させていくことができる。

(3) 神詠の形成、および解釈の展開についての研究

注目すべき事例として、次の神詠を取り上げて分析をした。

春日明神の歌とされる「ふだらくの」歌。興福寺南円堂創建の際に老翁が詠んだとされる歌が、春日明神の詠として広まった。これについてはすでに関連する論文を発表していたが、本研究において新たな観点から見直した。

山王権現の歌とされる「わがいほは」歌。『古今和歌集』では詠み人知らずとされる歌が、三輪明神の詠として広まった。さらに、山王神道においては山王権現の詠として知られる点に着目した。これについてはすでに関連する論文を発表していたが、本研究において新たな観点から見直した。

北野天神の歌とされる「いざここに」歌。『古今和歌集』では詠み人知らずとされる歌が、天照大神または北野天神の詠として広まった。特に北野天神説に注目して、天神縁起や道真の称号との関連から分析し、研究報告を行った。

素戔嗚尊の歌とされる「あしひきの」歌。『万葉集』の歌が歌学書で引かれる中で、様々な作者説と結びつくこととなった。その一説である素戔嗚尊の詠とする説に着目した。

(4) 神詠の形成と展開の背景についての研究

神詠を、『日本書紀』に見られる「神代神詠」、諸社の神々が詠んだとされる「諸社神詠」、中世に再編された神話の中で神々が詠んだとされる「中世神話神詠」に分類した。本研究で注目したのは後の二つとなる。「諸社神詠」については、二十二社制の確立と、それによる院政期歌学書の神詠への関心という点から考察した。「中世神話神詠」については、『日本紀竟宴和歌』以来の神話と和歌との接近と、中世の『古今和歌集』注釈の隆盛という点から考察した。

これらに(3)の成果、および既発表の論考などを加えてまとめ、公刊した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 橋本正俊	4. 巻 68-7
2. 論文標題 神々を配置する 熊野・白山と伊弉諾・伊弉冉	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学	6. 最初と最後の頁 2-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本正俊	4. 巻 27
2. 論文標題 翻刻 中院文庫蔵『古今序抄』と東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』序注（下）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 摂大人文学	6. 最初と最後の頁 94-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本正俊	4. 巻 26
2. 論文標題 翻刻 中院文庫蔵『古今序抄』と東山御文庫蔵『古今和歌集聞書』序注（上）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 摂大人文学	6. 最初と最後の頁 143-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 橋本正俊
2. 発表標題 古今集「いざここに」歌と天神御詠説 室町期天神信仰の一端
3. 学会等名 関西軍記物語研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 橋本 正俊	4. 発行年 2022年
2. 出版社 和泉書院	5. 総ページ数 244
3. 書名 和泉選書193 歌詠む神の中世説話	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 第3回 日本宗教文献調査学 合同研究集会	開催年 2021年～2021年
--------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------